

EdoSoba Story

prelude

蕎麦、soba、元年

江戸ソバリエ協会
ほしひかる

NHK に『激突メシあがれ～自作グルメ頂上決戦』という番組があります。

江戸ソバリエとしましては、麺類界の動きが気になりますので麺類だけは観ています。これまでは「しょうゆラーメン」、「うどん」、「パスタ」、「塩ラーメン」が登場しました。

6 月 11 日には「蕎麦決戦」が放映される予定とのこと、しかも仲間であるソバリエの武石眞澄さまが挑戦され、審査員もソバリエ講師の更科堀井の社長と神田まつやの社長、他の 1 名と聞いていますので、楽しみです。

頂上決戦は 3 名で行われます。「塩ラーメン」戦では、入賞作品「発酵塩 SOBA」、「桜梅香るワンタン潮そば」、「塩落花生ラーメン」の決戦が行われ、「発酵塩 SOBA」が優勝しました。

これまでの麺類対決の優勝者はだいたい私の予想と合っていました。それは私たち視聴者は味で判断するわけにはいきませんので、視覚からの出来栄と、紹介された登場人物の人生から判断しました。

ただし、今回は作品名に注視しました。というより気になったというのが正直なところです。それは作品名に「SOBA」「そば」「ラーメン」とあったことから、ラーメン界では「ラーメン」と呼ばずに「そば」と言っていることが一般的傾向になっていることに衝撃を受けました。

なぜかと言いますと、「そば」という和語からも、「蕎麦」という文字からも、困ったことだと思うからです。

元来、言葉の誕生というのは、原始人たちが相手に何とか伝えようとして現代の幼児のように言葉にならない言葉を発するところから始まったものと思います。ですから、一語や二語と少ないほど、原始語にちかいのでしょう。たとえば、一語はメ、テ、二語はミミ、ハナ、クチ、アシなどは、古代人がそうしたときに発した言葉の新芽のような語です。それが目、手、耳、鼻、口、足などの名称になったのだと思います。ちなみに、小麦、大麦などは知的分類によりますから、後世の名づけということになります。

また、縄文晩期に栽培植物のソバが日本列島に伝わって来たころ縄文人は十分言葉を習得していたといわれています。ですから「蕎麦」も、真ん中ではなく^{そば}傍

に、あるいは^{そばだつ}峠山地や、^{そび}聳える山に咲く植物を伝えようとして「そば」と発し

たことから誕生した言葉だと推定されます。

そして後に、文字(漢字)の「蕎麦」が伝わってきたので、文字では「蕎麦」と書いて、言葉(和語)で「そば」とよむようにしたのです。

この漢字の「蕎麦」をかの国では、ソバ(buckwheat)が75日で早々に育つところから「蕎^{たかし}」という字が当てられて作られました。ですから、「蕎麦」はソバ(buckwheat)だけの字なのです。

それなのに、ラーメン業界では昔から、《支那そば》とか《中華そば》と言ったりしてきました。とくに最近では《つけそば》《ざるそば》《酢橘そば》などがあり、漢字の「蕎麦」で表記する店も出てきました。「付け」「策」また「酢橘そば」は、《付け汁》《付けとろ(とろ蕎麦)》《ざる蕎麦》《酢橘蕎麦》といった具合に江戸時代から蕎麦業界の言葉ですから、模倣語になります。

さらには、街には「中華蕎麦」という看板を出しているラーメン店が近ごろよく見受けられるようになりました。若い店主に訊きますと「ひらがなより漢字がカッコイイから」と答えます。

このようなことから、私は講演をするときに「困ったラーメン店」としてこのことを挿話的にお話することがあります。

話はすこし飛びますが、『彼岸花が咲く島』という小説で芥川賞を受賞した李^り琴^{ことみ}峰さんという作家がおられます。小説は素晴らしい内容で、現代の混沌について考えさせられるものです。李さんは台湾で生まれ育ちましたが、日本語の魅力に誘われて、日本留学後に移住された方です。

朝日新聞の「ひと」欄で、李さんは「漢字、ひらがな、カタカナという3種類の文字を使う言語は(世界に)あまりない。漢語と和語と外来語、いろんな言葉が混在している言語感覚はすごく面白い」と言っています。李さんは表現の自由を求める作家として、日本語の感覚は魅力があるというのです。その通りだと私も思います。

ただ裏を返せば、これは国の文字を創造しなかった日本の哀しさを併せもっています。文字を持たない日本は中国の字を拝借しました。しかし中国字のままでは日本人の言葉をうまく文章にできません。

そこで漢字を崩した「ひらがな」が誕生することになります。

ですから「ひらがな」には元となった漢字があります。それを「字母」といいます。たとえば、「そば」という日本語は「曾」を崩して「そ」とし、「波」を崩して「は」と書くようにしたのです。ただ、「そば」と書いた場合、「蕎麦」の意か、「側」の意か、分かりづらいときがあります。そこで名詞は漢字で表記し、動詞、形容詞は漢字+ひらがなで表記するようにして、日本語の文章は基本的には【漢字+ひらがな】という組み合わせで書くようにしたのです。

たとえば、「今日のお昼に彼と一緒に蕎麦を食べた」といった具合にです。漢字は絵文字(見る字)だということを利用し、「きょうのおひるにかれといっしょにおそばをたべた」とするより、【漢字+ひらがな】の組み合わせ文が一目で分かるわけです。ここが日本語文の素晴らしいところです。

それからもうひとつ、日本の文字には漢文を読み下すために発明された「カタカナ」があります。「秋空」は翻訳機能をもつカタカナを利用して「秋ノ空」と読みます。こちら方が和語にふさわしかったのです。またカタカナはア)イ)ウ)・・・などのように番号・記号の代わりによく使用されます。いえば、カタカナは一人前の字ではないので、書体としての基準が生まれていません。ですから「片手落ち」の意味もあって「片カナ」といわれているのです。ただし、この翻訳機能の方は、明治以降とくに戦後になってから欧米語が入ってきたとき、欧米語表記にあてられるようになり、かえってカタカナが氾濫するようになりました。

ここで「ひらがな」に関しての余談です。

現代のひらがな「あいうえお・・・」が整理されたのは明治時代です。先ほど言いましたように「曾」を崩して「そ」、「波」を崩して「は」とすることを決めました。

実はそれ以前の時代には「楚」を崩して「そ」とする者、「者」を崩して「は」とする者など様々で、それこそ自由に、かつ混乱のまま使っていたのです。

そこで明治政府は「曾」を崩した「そ」だけを「ひらがな」とし、それ以外は「変体かな」とよんで整理したのです。こうして日本文で使用する「ひらがな」が誕生しました。話し言葉でいえば、標準語と方言の関係のような分類です。

ところで、皆さんは下記の字を見たことがありますね。蕎麦屋の暖簾に書いてある字です。実はこれが変体かなで、楚と者を崩して「そば」と書いてあるのです。どの蕎麦屋の暖簾でも見られますので、読めなくても、蕎麦屋だとすぐ分かります。そのくらい浸透したわけですから、これは字ではなく蕎麦屋全体の旗にちかいです。似たものとして鰻屋の「う」などもそうです。遊び心で鰻に似せて書いてあります。これも江戸の洒落でしょうか。



【楚者を崩した「そば」 白遊書】

さて、本題に戻ります。先述の**中華蕎麦**の問題です。小麦粉で作るラーメンですから、同じく小麦粉でつくる饅頭を持ってきて「中華饅頭」とすれば問題はなかったのですが、「中華蕎麦」では本来の意味を無視したためルール違反に等しい状態になったわけです。

従来、私たちは、甘味成分があるときは「甘い」と書き、甘味成分のせいではなく何となくあまさを感じるときは「あまい」とひらがなで書いてきました。これは日本人の知恵でしょう。旨味成分があるときの「旨い」もそうです。旨味成分のせいではなく、味がちょうどよいときは「うまい」とひらがなで書くと江戸

時代の栗山善四郎(「八百善」)は言っています。

そういうことからいえば、ラーメンを漢字の「蕎麦」はダメですが、ひらがなの「そば」なら許されているのでしょうか。こういう一定のルールの上の自由さが李琴峰さんの言う日本語文の面白さだと思います。

ところがです。昨今は日本文化人気、和食人気です。その詳細を述べることはここでは控えるとしまして、文字の話でいきますと、Washoku、Sushi、Sakeなどの名詞がそのまま英語のように使われています。そうしますと冒頭の Soba が問題になってきます。

ラーメンを「蕎麦」と書くのはダメだけど、「そば」ならいいでしょうと申し上げました。しかし、先述のように「ラーメン=そば」と言ってもよいとしたら、外国人の目からは「soba=ラーメン」ということになります。とんでもない話です。

「蕎麦」と「そば」の使い分けは、国内の日本人どうしでは通用しましたが、グローバルの時代になると、うまく機能しないように思います。

また、人によっては、食べるのは「そば」と言い、その他を「蕎麦」と書く、と説く人がいますが、一般的には名詞は漢字で、漢字を知らない子供はひらがなで書くの普通です。それに先ほどの例で言いますと、ソバも、そばも、蕎麦も、英語化では soba になりますから、もはや通用しない使い分けということになります。

少し前に、千葉市で講演をさせていただいたとき、その教室では感想文を書かなければならなかったようで、こんな感想文がありました。

「70 歳代になって、今日初めて『蕎麦』と漢字で書きました。すくすく伸びるから蕎という字に草冠をのせる、と教えてもらったので、迷うことなく書きました。小学校時代の国語の時間に、もっと字の成り立ちを教えてほしかったと思うと同時に、他の字の成り立ちにも興味がわきました」というのです。



〔ラーメン店 1〕

〔ラーメン店 2〕

〔ラーメン店 3 すだち蕎麦〕

世間は無常なる変化にさらされます。ですが、その変化がすべて正しいとはかぎりません。時には抗うことが必要です、ラーメン、パスタ、饅頭、蕎麦はそれぞれの矜持をもって正確に表記し、そのうえで麺類みな仲良くしていくべきではないでしょうか。

そこで蕎麦につきましては、稲・米・飯にならって、次のような名前でよびたいと思います。

野生稲	植物	野生蕎麦
栽培稲	作物	栽培蕎麦
米	食糧	玄蕎麦
精米	食品	蕎麦粉
飯	食物	蕎麦

[Copyright ほしひかる]

日本文化というのが、いつから始まったかということはなかなか簡単に述べることはできません。しかし、正式に日本の歴史が文字で書かれた『古事記』『日本書紀』からという見方もあるかと思います。それだけ文字は文化の担い手であるといえます。

私たちは日本人ですから、日本の文字を大切にしたいうえで英語化に臨みたいと思います。今年は「蕎麦、soba、元年」といったところでしょうか。

最後になりますが、筆者は現在『江戸蕎麦ものがたり』と称する拙文を縷々書き記しています。

上記はその『江戸蕎麦ものがたり』シリーズの序文のつもりで「蕎麦・soba」という言葉について述べました。つきましては、今回は総合題名の『江戸蕎麦ものがたり』を『EdoSoba Story』と英字で表記しました。

なお、「Soba」と「EdoSoba」の違いについては、別の機会で説明したいと思います。

以 上
2025. 5. 28

《参考》
黒田正子『語源をたどれば京都』（講談社）
栗山善四郎『江戸流行 料理通』（教育社）